

徒然草

BBC と女子大生：いまどきの女子大で教えるとは

滝澤 三郎

東洋英和女学院大学教授

2008 年の 8 月に UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）駐日代表を最後に 28 年間の国連勤務を終え、2009 年 4 月からは東洋英和女学院大学で、国際機構論や移民・難民問題を教えている。女子大で教えているという友人などに羨ましがられるが、実際、桜が満開の春、色とりどりのスカートを翻して歩く女子学生の中に紛れ込んだり、大教室で 200 人以上の女子学生の視線を一身に集めると（＝服装をチェックされる）、竜宮城もかくあらんか、と思ってしまう。着任早々に教員の集まりでそういう発言をしたら、全教員の視線を一身に集めた。いまどきではセクハラ的、時代錯誤的な不適切発言なのだそうだ。

東洋英和はいわゆる「お嬢さん大学」でミッション系の女子高から来る学生が大半だ。1990 年前後に生まれた彼女たちは、経済的には苦勞知らずで育ってきた。加えて「ゆとり教育」もあって比較的のんびりとした環境で、素直に育ってきたという感じの学生が多い。とはいえ、ある学生が「私はすくすくと育ちました」と言ったのには驚いた。数多い推薦入学者は、厳しい受験競争も知らない。学バスに乗って学生の会話を聞いていると、彼女たちは「BBC」に強い関心があることが分かる。つまり「バイト、ボーイフレンド、サークル」だ。早くして父親を亡くし、生活と勉強のためバイトを強いられた元「苦学生」の私としては、遊ぶためのバイトは極力減らし、「勉強、ボーイフレンド、サークル」の BBC をして欲しいと思うのだが、いまどきの女子学生に「苦学生」という言葉は死語だろう。

大学進学率が 6 割近くになり、「大衆化した」大学は、大学進学率が 2 割前後だった団塊の世代時代のそれとは違っている。文科省の方針で、1 コース半年間の授業回数は 15 回、休講は原則として補講でカバーすることになっている。休講になると皆が喜んだ時代は去った。殆どの大学で起きているようだが、「ゆとり教育」の予期せざる効果もあって、学生の平均的学力の低下は著しい。基礎知識や数学の能力がないものが多いから、経済学や法学などの科目は「難しい」として学生に敬遠される。

女子学生は一般に授業に真面目に出席するが、1 年、2 年生の授業では女子高の雰囲気も漂う。1 年生の授業は「高校 4 年生」を教えるつもりになった方がいい。私は、毎回の授業の終わりに、学生に B5 で 1 ページのコメントを書かせるのだが、噛み砕いて図解入りで説明しないと「今日の授業は難しかったです」といったコメントが出てくる。理解できなかった自分よりも、わかり易く説明しない先生の方に責任がある、という発想らしい。確かに、教師が教育というサービスを提供する「サービス・プロ

バイダー」であると考えれば、学生が理解できない授業をする教員には「サービス瑕疵責任」があることになるだろう。ちなみに、学生による教員の評価は公表されるので、学生のコメントは無視できない。

さて、外観は華やかな女子大生だが、3年、4年の「就活生」の内面は灰色だ。「就職超氷河期」と言われる厳しい就職状況を彼女たちは肌で感じている。就職難はこの先もずっと続くだろうという見通しのため、2年生以下の学生も不安を持つ。「就職氷河」は女子大では特に冷たく厚い。緩やかな生活に慣れ、競争には不慣れな女子学生は、初めて経験する厳しい就職戦線で、他大学の学生、特に男子学生と競い合うことには自信がない。最近では、グローバル戦略を採る企業は候補者選別を厳しくして、採用も国際的に行う。ハングリー精神に燃え、かつ英語もできる中国人などの留学生と競争するとなると、お嬢さん学生はなおさら怖気づく。

そのような中で、彼女たちに刺激を与え、結果的に「喝を入れる」ことになっているのが難民問題や貧困問題の授業だ。例えば祖国からはじき出され、受け入れ国でも安住の地を見つけられない1500万人に上る世界の難民の境遇や、小学校にも行けない7000万人とも言われる「児童労働者」の実態は、彼女たちにとっては大きな驚きだ。今まで空気のように意識しないで来た自分の生活がいかに恵まれたものであったか、国際的には彼女たちの生活は例外中の例外に属することに初めて気付く。自分の弟や妹の年代の子供たちが、絶望的な境遇にも関わらず頑張っている姿を見ると、彼女たちは「日本に生まれてよかった」と思い、大学まで出してくれた親に感謝の気持ちを持つようになる。自分の緩んだ生活態度を大いに反省し、罪悪感を感じるようになる学生もいる。

「国際協力入門」の授業を履修していたある1年生は、次のようにコメントしてきた。「... 未来が見えない人生なんて、私には想像できません。この何回かの授業を受けて、私は自分の生活を振り返るようになりました。家族や友人などに、必ず1日に1回は“ありがとう”と言うようにしています。…」よくあるコメントが、「就職などのことで不安になり、心配していた私の悩みなんてちっぽけなものだと気が付きました。学校に行きたくても行けない子どもたちのために、私は授業中に居眠りしたりせず、もっと勉強します」といったものだ。そして一部の学生は、「私にできることをしてみたい」と行動に移る。手軽な募金をするものが多いが、ボランティア活動に参加したり、NGO活動を始める学生もいる。今年だけで3つの学生ボランティア団体が学内にできた。

その意味で、貧困問題や難民問題を学ぶことは、彼女たちの人生に小さからぬ影響を与える。日本の国境の外で起こっている地球規模の問題を知ることが、BBC的生活に安住していた自分の生き方を反省し、自分中心の小さな世界から外に飛び出して行く勇気につながってゆく。

今 20 歳の女子学生の 4 分の 1 は生涯未婚のまま、という国立社会保障・人口問題研究所の推計があるものの、東洋英和女学院の卒業生の多くは 20 数年後には母親となっているだろう。学院のモットーは「敬神奉仕」だが、私の願いは、母親となった彼女たちが、日本が世界の中で置かれた立場をいつも意識していることだ。中学生ぐらいになった娘に、「お母さん、テレビニュースでやっていた. …って何のこと？」と問われた時、それなりに説明できるような視野の広い女性になっていることだ。特に、人の痛みに敏感で、弱い立場にある人々のために何かをする行動力もある女性に育てて欲しいと思う。

大学で教えられる知識の量など知れたものだし、すぐ陳腐化する。大切なのは、教員が学生に世界への目を開く何かの「きっかけ」を与えることだと思う。人が伸びることを信じ、その「きっかけ」を与えることの大切さは、大学教育一般、さらに開発援助の世界にも当てはまることではないだろうか。